



一般財団法人

第 12 号:2025 年 12 月

芹沢光治良記念文化財団 ニュース (12)

『狭き門より』のこと

代表理事 勝呂 奏

今年の 10 月に小学館の P+D BOOKS から、芹沢光治良の『狭き門より』が再刊になった。新潮社からの初刊が 1976 年であったことを考えるなら、これは半世紀振りになる。手に取って読んでみると、「芹沢光治良らしい作品だなあ」という素直な感想が引き出される。小学館からは紙の本とデジタルの本を同時にするこの形式で、『サムライの末裔』(2019 年)『孤絶』(2019 年)『ブルジョア・結核患者』(2023 年)に続く四点目になる。出版事業の困難を極める今日、この有り難い出版に継続的に取り組まれた小学館とその担当編集者に、心からの謝意を呈したいと思う。この企画の当初に並々ならぬ熱意を見せた、芹沢光治良の四女で本財団の創設者である故・岡玲子さんも、さぞかしお喜びのことだろう。

この『狭き門より』の再刊については、それを記念した集りがマグノリアを会場にして持たれた。芹沢光治良のこの作品に関わるエッセイ「ある作家の秘密」と、テレビでのインタビューを内容にしたものである。財団事務局の行き届いた準備があって、大勢の参会した方も満足されていた。芹沢光治良の作品はいつまでも人を集め、それを語らせる生命を持っているのである。こうした催しのある度に、芹沢光治良が矜持としたアカデミシャン、「不死の人」であることを思う。

この『狭き門より』については、来年に『芹沢光治良ノート (6)』が発行の予定で、編集委員がすでにミーティングを重ねている。その際に作品への意見をメールで求められて、おおよそ次のように返事したことがある。

……僕個人の作品への考えですが、特に取り上げて論じたことはなく、「評伝芹沢光治良」に書いたこと (p 282~283) 以上のことはありません。

その一つの軸は皆さんのご意見にあるように、光治良自身の説明を踏まえた女性像「自己のために生きた美子」にあるでしょう。

これは終戦直後の長篇小説「結婚」の延長にあるように思います。

それというのは新しい日本国憲法の下、改正民法が公布されて女性の生き方が、封建的な考えから自由になって大きく変わって行きます。

しかし、簡単に変わったわけではなく、以来 30 年近くを経て「狭き門より」のような女性が、ようやく現われてきたと考えることができそうです。

これが作品の中心でしょうが、創作法として「おぼろの女」が気になります。

夢に現われた存在の働き掛けから作品を書くというのには、川端文学を論じて「さにわ」を指摘したのを思い起こさせるのです。

それは後の「神シリーズ」の創作法に通じ、創作といっても自ら書くのではなく書かされているスタイルは、この「狭き門より」から始まったと言えそうです。

光治良がどうしてもそのような創作法を選び、そこにどのような効果を期待していたかは考えてみるべきでしょう。……

ここに書いたことに変更はないが、その後に『狭き門より』を再読しながら思い出すことがあった。それはかつて作った小冊子『芹沢光治良の手紙—妻になる人へ』（2010年）のことで、芹沢光治良が結婚前に妻になる金江に送った手紙である。その一通（1925年3月？）に、芹沢光治良は結婚を前にして求める〈決心〉を次のように伝えている。

- 一、愛を堪へること、
- 二、理知的に相手（私）を理解しようと努めること、
- 三、人間としての教養、向上を怠らぬこと、
- 四、自分に愛足らず、理解足らなかつたら、其時はいさぎよく離婚しよう。

大正デモクラシーの時代に青春を送った知性の、やや理想主義的に過ぎる結婚観が現われていると言うべきかも知れない。しかし、芹沢光治良はこうした考えで金江と結婚し、幸福も不幸も共有して長い夫婦の生活を築いて行くことになったのである。そうしたことの一面が、『狭き門より』のヒロイン美子にも投影するところがあるのではないかと、再読しながら立ち止まることがあったのである。これも作品を考える端緒になるかも知れないと思い、ここに書き留めておきたい。

ここまで随感的に書いてきたが、最後にお詫びして置きたいことがある。それは5月に本財団の企画として「芹沢光治良とフランス文学—ジッドを始めとする文学者たち」の講演会を企画したが、僕に病気の再発があつて急遽中止したことである。参加を楽しみにされていた方もあろうかと思うが、事情が事情だけにどうかお許し頂きたい。僕は今も療養の途中にあつて、本財団理事の職責を果たせずにいるが、恢復の日の来ることを待ちたいと思う。

以上

『平和に対する強い思い』

理事 岡寿里

芹沢光治良文学に対する変わらぬご支援に心より感謝申し上げます。今年は太平洋戦争終結から80年目となりましたが、現在の日本、又は世界で起こっている出来事を芹沢光治良はどのように受け取るか、この一年はよく想像する事がありました。今でも目に浮かぶのは祖父が毎朝、朝食後に一時間ほどかけて新聞を読むことでした。はっきりはしていませんが確か朝日新聞、日経新聞、毎日新聞、読売新聞、と全部一通り目を通していた記憶があります。そして夜はNHKの7時のニュースを必ず見ていました。世の中で何が起こっているのか常に興味を持っていました。また、戦争の辛さを経験したため、次の大戦争が起こるのではないかと心配もしていました。特に印象に残っているのは1979年のイラン革命が起こった時でした。あまりにも幼く、状況は理解していませんでしたが平和を守る重要性については理解しました。祖父は戦争がもたらす不幸、人間性を保つ重要性、そして平和に対する強い思いを様々な作品を通して書き残してくれました。複雑な世界情勢が続くなか芹沢光治良文学はこれまで以上に通用する気がしています。これからも芹沢光治良文学を広めるためにご協力をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

■ 2025年を振り返って（事務局）

(1)「芹沢光治良ノート⑤」発行 2025年5月

・「サムライの末裔」の紹介

(2)「財団ニュース(11)」発行 2025年5月

- ・「芹沢光治良と音楽と・講演と歌の調べ」 2024年6月22日
- ・「芹沢光治良作品“神の微笑”」朗読会 2024年12月15日
- ・「芹沢光治良と軽井沢文学」講演会 2025年3月29日

(3)東京新聞に「サムライの末裔」の記事が掲載される。

・“ピカドン憎み刻んだ「魂の記録」” 2025年8月28日

(4)「狭き門より」小学館より再刊 2025年10月

(5)「狭き門より」ポストカード発行 2025年12月

(6)「狭き門より」再刊記念の会 2025年12月7日

○朗読「ある作家の秘密」(“狭き門より”に関するエッセイ)

・朗読者：大窪 晶(おおくぼ あきら)

○「NHK スタジオ 102 インタビュー(昭和 51 年)」

・「狭き門より」紹介の映像。

※名古屋の“芹沢文学愛読者の会”の安井正二様からお借りしました。

・初めて参加された方 3 名の総勢 43 名の楽しい会となりました。

・「光治良先生の映像は、先生に直接お会いしたことのない参加者にも好評で、79 歳のお元気な様子を拝見して感動していました。」

(朗読者のお話)

「言葉をなぞるだけでは届かない、光治良先生の魂ともいえる『何か』を掴まなければならない——。そんな光治良文学ならではの朗読の難しさを感じました」



■2026 年度の行事計画

「主な行事予定」

1. 「芹沢光治良ノート(6)」 「財団ニュース(13)」の発行予定
 - ・ 芹沢光治良に関して、幅広い年齢層の方に知っていただき、興味を持っていただくための「芹沢光治良ノート」及び「財団ニュース」を刊行する。
2. 講演会・読書会などの開催
 - ・ 代表作である『人間の運命』『神シリーズ』を中心に、芹沢文学を多くの方に広める講演会・読書会を開催する。
 - ・ 活動時期 2026年度に3回実施予定。(5月、12月、3月)
 - ・ 活動場所 サロンマグノリアを中心に行う。
3. 財団ホームページの充実と電子書籍を若者にアピールする。
4. 全国の“芹沢文学愛読者の会”の皆さんと協力して芹沢文学をひろめる活動をする。

『芹沢光治良ノート(6)』の紹介

芹沢光治良の作品に、まだ出会っていない人たちに芹沢作品を紹介する小さな冊子です。

■「狭き門より」の紹介 (2026 年 5 月発行予定)

- ・ 光治良先生は、長い作家生活の中で三人の日本女性を描いた。
『愛と死の書』(夫に生きた若子)。『巴里の死す』(子に生きた伸子)。
『狭き門より』(自己に生きた美子)。
本作品『狭き門より』は、他の二作と異なり、明るく幸福な結末を迎える。
- ・ 「自己に生きる者は、境遇がどうであれ幸福である」

※「狭き門より」冊子を身近な知人、友人にお伝えください。

「芹沢光治良ノート シリーズ」

- ① 芹沢光治良ノート (1) 『完全版 人間の運命・父と子』
- ② 芹沢光治良ノート (2) 『巴里に死す』
- ③ 芹沢光治良ノート (3) 『孤絶』
- ④ 芹沢光治良ノート (4) 『ブルジョア』
- ⑤ 芹沢光治良ノート (5) 『サムライの末裔』

※これらのノートは、財団ホームページ「芹沢文学ガイドとライブラリー」に掲載しています。ご覧ください。

“芹沢文学のまわりで シリーズ（７）”

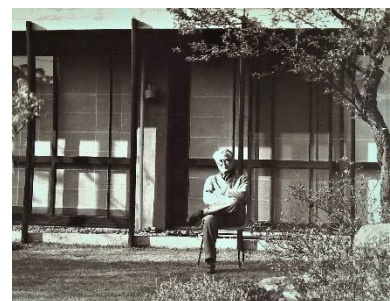
野見山恵美子 芹沢光治良記念会（学芸・作品資料）担当

【八重垣姫】

東中野のサロン・マグノリアには、光治良先生とご家族が長年大切にされていらした八重垣姫の文楽人形がある。この愛蔵の八重垣姫を主題に書かれた文章「人形師の涙」（1995：別冊小説新潮第9巻第二号、1997：『芹沢光治良文学館10』）には、昭和十六年ごろに作家林芙美子の「お仲人」により、桐竹紋十郎から芹沢家に「嫁入り」したこと、金江奥様のお母様が初孫である万里子さんへの贈り物として、数ある文楽人形の姫君たちの中でも、親交のあった川上貞奴の薦めにより、八重垣姫をつくらせたことが記されている。そして、かつて義父藍川氏が御園座（！）で「本朝廿四考」に勝頼として西川流の舞台に立った時には、相手役の八重垣姫―それは姿も良く、芸もうまくて美しい姫―を義母がつとめたことに仰天し、それを観ていた貞奴は義母の八重垣姫に感心して、その時の義母の姿を永久にとどめて、愛する孫にのこそうと考えたのだろうか。まる六年かけてつくられた「八重垣姫の人形を見ると、私は亡き母のただ一回の舞台姿が臉に浮かんでならなかった。勝頼に寄せる切ない愛を生かした武士の娘らしい立派な態度を、巧みに表現した母が。あの舞台の母は現実の母からは想像できなかった。恐らく不幸な母の一生の間に生命を輝かしたただ一回の瞬間であつたろう。その一瞬の輝きのような姿を形にとどめて、孫にのこしたのは、あわれな母に対する貞奴の友情ある思いやりであつたろう。」

「父ははじめてこれを見た時、『これはお母さんそっくりじゃないか』と、大きい目をして、うなるような吐息した。この人形に父は母を感じたのであろうか。見捨てられたような母が八重垣姫に扮して、かくしていた美を発揮して父を驚かせた日のことが思い出されたのであろうか。それとも古い日本流に、母の魂魄が人形にうつって、もののけ感じたのもあろうか、父は、『お母さんはえらい人だった』と、一言加えて、許しでも乞うような調子で、八重垣姫を見入った。」

八重垣姫の人形には、他にも戦時中のいくつかの印象的で重要なエピソードがある。芹沢光治良とその家族においても、そして芹沢文学の文脈の中においても、幾重にも深き重要な意味を持つ八重垣姫。この度、文楽人形専門家の方とのご縁をいただき、手入れ・修復の運びとなり、なお一層の輝きと美しさを放つ時を待っている。



入手可能な「電子書籍一覧」の紹介

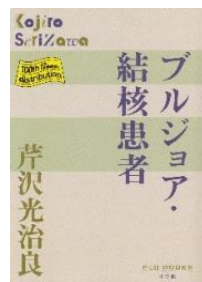
「小学館」



『狭き門より』



『サムライの末裔』



『ブルジョア・結核患者』



『孤絶』

「新潮社」



『神の微笑』



『愛と死の書』



『愛と知と悲しみと』

「角川 e 文庫」



『離愁』



『故国』



『坂の上の家』



『春の谷間』

※「芹沢光治良の電子書籍一覧」（BOOK☆WARKER）が掲載されている『QR コード』。



財団寄贈・芹沢光治良に関する図書の紹介

○「伊豆の近代文学誌」（鼎書房） 勝呂奏（財団理事）

・川端康成・梶井基次郎・宇野千代と伊豆・湯ヶ島・・・。



○「国際派・芹沢光治良：― 若き日の渡仏と文業のサムネール」

（明治書院） 藤澤全

・光治良のフランス留学以降を探り、発掘資料の紹介・吟味、帰国後の文壇活動『ブルジョア』から『巴里に死す』まで10篇を取り上げる



■現在入手困難な「神シリーズ8作品」を1セットに収めた

「神と人間」をネットで購入できますよ！！


●「神と人間(全8冊)」¥15,400



『編集後記』

一年の歩みと来年度の計画をまとめながら、皆さまのご協力への感謝を改めて感じました。電子書籍も気軽に手に取っていただければ嬉しいです。次号も楽しみにしててください。

※お知り合いの方に会員になっていただくようにお勧めください。

（会費無料です。財団ホームページより登録できます。  ）

発行： 一般財団法人 芹沢光治良記念文化財団

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-3

事務局 池田 三省

メール：serizawa.52@nifty.com

財団ホームページ

URL：<http://serizawa-kojiro.com>

「懐かしの写真」

